入部谷越え

朽木と西近江路を結ぶ道

朽木地域には昔から京都と若狭地域を結ぶ若狭街道（通称：鯖街道）が通り、多くの人や物資が往来していました。

一方で、朽木と西近江路を結ぶ道もありました。市場から宮前坊を通り中山峠を越えて長尾に出る「中山道（長尾越）」と市場から野尻を通り安曇川の左岸に沿って上古賀に出る「朽木道」です。またその他に、市場から宮前坊を通り武曽に出る「入部谷越え」と村井から畑に抜ける「横谷越え」がありました。

入部谷越え

江戸時代、入部谷越えは大溝（現在の勝野）に朽木の特産品である木炭を運び出す主要な道でした。江戸時代の輸送量は明らかではありませんが、明治11（1878）年にまとめられた『滋賀県物産史』によると朽木村で生産された木炭の約34％が勝野に運ばれています。炭を運び終えた朽木の人々は、大溝で日常生活に必要な物資を調達し朽木に帰っていました。また白鬚神社のなるこ参りや嶽観音（だけかんのん）の千日参りに行くにもこの道を使っていたといわれています。入部谷峠の東側の麓である武曽には、休憩場所として茶店・旅籠（はたご）（宿）などが並んでいたといわれています。

高島郡村絵図（一部・文化財課で加工）

入部谷峠の馬頭観音

そして明治15（1882）年に琵琶湖に太湖汽船（たいこきせん）が就航し、大溝港からの湖上交通（蒸気船）が利用できるようになると、朽木から入部谷を越えて、大溝港から大津・京都への行楽や修学旅行、伊勢神宮の参拝などに行く人が多くなりました。

このように、入部谷越えは木炭を運ぶ道であったとともに朽木の日常を支える道でもありました。

道路の整備

明治30（1897）年になると朽木市場と安曇川町田中（南市）を結ぶ県道朽木線が開通し、人馬での輸送から自動車への輸送に代わるきっかけとなりました。その県道の開通以降、明治から昭和初期にかけて道路や橋梁が順次整備され、朽木へのアクセスは容易になっていきました。

入部谷越えも、峠の下にトンネルが整備され道路が通ると峠道としての役割を終えることになりました。役割を終えた峠には、現在でも馬頭観音が祀られており当時の往来のようすを偲ばせます。

問 文化財課
☎（25）8559

編集雑感

今月号の表紙は、３年ぶりに開催された第９回FAIRY TRAIL びわ湖高島トレイルランニング in くつきのスタート直後です。これから長い道のりに挑戦する選手たちの表情がくっきりと見えて、どこか背中を押されるような気持ちになりました。イベントの様子は 15 ページに掲載していますので是非ご覧ください。私も体力づくりにウォーキングを再開しようかな。（M）

広報たかしま
令和４年 ８月号 No.271
発行▼高島市　編集▼政策部企画広報課
〒520-1592 滋賀県高島市新旭町北畑565番地
☎0740（25）8000㈹
http://www.city.takashima.lg.jp
t-info@city.takashima.lg.jp

R70 古紙パルプ配合率70%再生紙を使用。